**私**

**を困難に立ち向かわせたもの**

**石田　秀一　（昭和37卒）**

私の病院は、石巻市旧北上川河口より２km上流にあり、川岸からわずか30ｍしか離れていない５階建ての病院である。東京に本部がある健育会グループが経営している病院で、グループは東海地方から北海道まで広域に病院や老健施設を運営している。当病院は一般床、回復期リハビリ病棟、療養病棟を有する１３５床の慢性期病院で、意識のない人、寝たきりの人などを含め何らかの医療を必要としていて、家に帰りたくても帰れない人たちが入院している。当然高齢者の方が多く、リハビリ病棟に入院している人をのぞけば、この病院を終の住み家ととらえている人たちがたくさんいるということである。

**石田　秀一**　（いしだ・しゅういち）

平鹿郡増田町（現横手市増田町）出身。

増田町は今話題の蔵の町。旧石田理吉家木造３階建て家屋は生家。昭和44年東北大医学部卒業後東北大第２内科から同54年、石巻赤十字病院に。同病院副院長を経て平成18年、石巻港湾病院院長就任。

　平成23年３月11日午後２時46分。突然大地震が襲った。その時私は、極めて海に近い患者宅へ往診に出かけていた。そこで地震に遭い大津波警報の中をやっとの思いで病院に戻ることが出来た。往診した患者さんは津波で亡くなったことを後で知った。今考えるとよく生還したと思う。

　病院に到着後、５分後には津波の第１波が到達し、次々と襲う津波で１階部分は壊され、大切な医療機器、カルテ類が奪われてしまった。既にエレベーターは使えず、２階３階の入院患者を人力で避難させた。電気、水道、ガスが断たれ、その日の午後10時過ぎには通信も途絶えた。職員、患者の無事は本部に伝えてあったが、その後３日間は音信不通となった。ラジオ放送と懐中電灯の明かりが頼りであった。

　劣悪な環境の中で患者と職員の籠城生活が始まった。入院患者の家族、外来患者がそのまま避難していたから、病院というより避難所であった。一晩で病院から水が引いたので、倉庫に残っていた水と食料を調達でき、流されないで残っていた医薬品も確保できた。患者さんには水と１日２食の食事しか用意できない。一生懸命やっているのだが、毎日のように亡くなる人がでてきた。

　職員はというと、自分の家族の安否もわからず、家の被害状況もわからないまま働いていた。日頃地域の人たちに豊かな医療を提供するために努力している。責任感であろう。正に、チーム医療であった。非番の看護師２人を亡くした。地震後、車で病院に向かって津波にのみこまれたのである。これから病院に向かうと母親に携帯で告げたのが最後となった。私はこういう職員とともに働いていることを誇りに思うし、この病院を守らなければと心に誓った。

　３日目の夜に石巻から仙台に向かい、本部と連絡がとれた。

その時本部では既に動き出していて、翌日の夜には、暖房器具、ガスコンロ、食料など救援物資が届いた。その後も続々と届きはじめ、女性の下着のはてまで送られてきた。７日目からは医師を含めた応援部隊も東京から駆けつけてきた。おかげで職員を交代で休ませることが出来た。

　どうしてこのような援助が素早くできたか。健育会の組織力がしっかりしていたからと思う。こういう広域にまたがる災害時には広域にまたがるグループが力を発揮する。近い距離ではお互いに被災しているため連携はできない。できたとしても充分機能しないであろう。救援を求めて市役所に出かけても、援助どころではなく、そちらはそちらでやってくれと言われた。早い支援のお蔭ですぐに立ち上がることができた。４月11日には検査機器もそろい、外来を開始することが出来た。職員の頑張りと本部の援助に感謝している。

　もう一つ大きな力を忘れることはできない。私の友人たちである。小学校、中学校の同級生、高校、大学時代の友人、クラブ仲間からたくさんの励ましの言葉や支援をいただいた。一緒に働いた先生、なけなしの食料を置いていった若い研修医もいた。お互いに被災者なのに。そこで頑張るのが天命だという言葉に勇気づけられた。そして家族の協力があったからこそ生き延びられた。どんなことがあっても、人と人のつながりがあるうちは大丈夫だろうと思う。

　私を困難に立ち向かわせたもの、それはゆるぎないリーダーシップのもとに、心を一つにした職員の頑張り、迅速に支援してくれた本部の組織力、友人達の温かい励ましと私を支えてくれた家族の絆である。言葉に表わせない感謝の気持ちで一杯だ。

ありがとうございました。

　当院は平成23年８月１日、完全復旧をとげた。

津波被害を受けた石巻港湾病院前の惨状（平成23年3月）

**大**

**震災と原発事故**

**人と人のつながりを実感**

**矢内　大丘〔昭和36卒・矢内（鈴木）健之長男〕**

私の父は秋田高校の卒業生の矢内（鈴木）健之である。幼い頃から秋田高校で過ごした頃の懐かしい話を聞かされて育った。今回、父の代わりに平成23年３月11日発生の東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故について書くこととなった。あの震災の記憶は心に深く刻み込まれている。

**故・矢内（鈴木）健之（やない・たけゆき）**

昭和36年秋田高校卒卒。駒沢大学地理学科卒。工学院大学卒。地図製作会社勤務を経て、福島県川内村・長福寺住職。

　福島県双葉郡川内村は東京電力福島第一・第二原子力発電所から直線距離で20kmから30kmの位置にある。阿武隈高地ののどかな山村である。平成23年３月11日の本震は激しい揺れで、寺の本堂も傾き、屋根瓦は落ち、壁も崩れ、参道や石垣の崩落、地割れなどの被害が出たが、津波による被害はなかったし、電気が止まることもなかったのでテレビから情報を得ることができたことは幸運だった。

2列目中央が故矢内健之氏、前列右が筆者

　しかし、その日の夜から状況は変わっていく。テレビで原子力発電所の異常が流れ始めたのである。地鳴りとともに余震が絶え間なく続き眠ることができない。テレビ画面を見ながらこたつの中で一夜を明かした。夜が明け、とりあえず何かしていないと落ちつかないので、地震による被害の後片付けを始めていた。午後になると原子力発電所のある富岡町などからの避難民が川内村に集まるようになる。私の寺にも知人や親戚など十数人の方が、通常ならば30分もかからないところを８時間もかけて避難してきた。とにかく暖まってもらおうと、こたつやストーブを出し、温かいお茶で一休みをしてもらった。避難してきた方は、心身とも疲れきっているにもかかわらずテレビを食い入るように見つめていた。

あ故・矢内（鈴木）健之（やない・たけゆき）

昭和36年秋田高校卒。駒澤大学地理学科卒。工学院大学卒。地図製作会社勤務を経て、福島県川内村・長福寺住職。

　12日午後３時36分、福島第一原発１号機が爆発した。そこにいた誰もが、「そんな馬鹿な」と思った。だが、テレビからは「避難の必要はありません」と同じ言葉が流れてくるばかりである。皆でカレーを食べ、早めに布団で休もうと寝具の準備をしていた。そこにテレビで福島第一原発から半径30kmまでの距離に避難指示が出る。私の住んでいた所は原発から直線距離で21kmしかない。さらに遠くへ避難すべき状況になり、避難してきた方は各々の知人親戚を頼って、また散り散りに避難していった。私も親戚４人と一緒に福島市の親戚の家へと避難することになる。その時はとにかく急いでいたし、すぐに戻れると考えていたので、身の回りのものだけで避難した。福島では水や食料がなく、給水車にも並んだ。放射能に追われて逃げるなどというのは映画の中だけの話だと思っていたが、いざ現実となり、後ろから追いかけてくるのは死をもたらす雲なのだと思うと恐ろしかった。

　福島でほっとしたのもつかの間、今度は３号機が爆発した。どこにいっても給油できなかったため、ガソリンがなくなるのではないかという不安の中、さらに会津美里町の親戚宅へと深夜避難した。しかしますます状況が悪化していくため、大阪にいる親戚を頼り９人で新潟空港から大阪空港へと向かうこととなる。新潟空港はロシアや中国へ帰る人たちでごった返していた。荒天の中飛行機が飛び立ったときの安堵感は忘れられない。「助かった」そう思った。飛行機が大阪に着いたとき、ネオンが輝き、スーパーには品物があふれていた。別な国に来たのかと驚いた記憶がある。

　事故から３か月経った頃一時帰宅したが、田畑は荒れ果て無残な姿をさらしていた。帰りにスクリーニングを受けたとき、その場所には自衛隊の装甲車が並んでおり、警備の厳重さに改めて事故の重大さを思い知らされた。頭の上から靴の裏まで調べられ、係の方から「大丈夫です、汚染はありません」と言われたときは、ほっと胸をなで下ろした。１年ほど大阪市で避難生活を送り、現在はいわき市の仮設住宅で暮らしている。

　今回の震災とそれに伴う避難生活の中、本当にいろいろな方にお世話になっている。人と人のつながりによって助けられた。普段の生活では当たり前のことが当たり前でなく、いろいろな人に支えられて成り立っているということが改めてよくわかった。ありがたいことだと思う。原子力発電所の事故は現在も継続し、放射性物質への対応など問題は山積している。福島の未来がどう変化していくかは未知数であるが、今回受けた感謝の思いを忘れることなく、これからの人生で少しずつお返ししていきたいと考えている。

（大震災・原発事故について矢内健之氏に書いていただく予定でしたが逝去されました。ご子息のご厚意により寄稿していただきました。）